対人場面におけるレジリエンスが感情表出に与える影響

○世良真一郎・岩永誠

(広島大学大学院総合科学研究科)

キーワード：レジリエンス, fEMG,

Effects of resilience in an interpersonal situation on the influences facial expression

Shinichiro SERA and Makoto IWANAGA

(Graduate School of Integrated Arts and Science, Hiroshima Univ.)

Key Words : resilience, fEMG,

目 的

日常生活では変化する状況に適応することが求められる。レジリエンスとは、困難な状況においても上手く対処し、適応を維持する能力のことをさす(Masten, 1989)。レジリエンスが高い者は、感情を喚起させる刺激に対して感情の柔軟性を持つことが確認されている(Waugh, 2011)。感情の柔軟性とは、感情を表出する際意識的に誇張・抑制を行い、感情を維持、切り替える能力を指す。感情の柔軟性に関しては言語表示による意図的制御の検討はなされている(Westpaul et al, 2010)が、対人場面での検討はなされていない。他者が競争的であるか協力的であるかという状況の違いによっても、参加者の表情表出が異なることから (Lanzetta & Englis, 1989)、レジリエンスが高いと状況適的な制御ができるものと考えられる。本研究は、実験協力者(さくら)が参加者に対して否定的な態度をとる条件と友好的な態度をとる条件を設け、レジリエンスの違いにより表情表出に及ぼす影響を検討する。

仮説 1 ネガティブ条件はポジティブ条件と比較して、笑顔刺激に対する笑顔表出が小さくなり、しかめ面表出が大きくなる。一方で、しかめ面刺激に対する笑顔表出が大きくなり、しかめ面表出が小さくなるだろう。

仮説 2 レジリエンス高群は同条件の低群と比較して、仮説 1 の傾向が顕著に認められるだろう。

方 法

分析対象者：20 名(女性 9 名、平均年齢 19.08)。レジリエンス尺度得点の中央値折半により高群と低群に群分けするとともに、各条件にランダムに振り分けた。ネガティブ条件(高群 5 名、低群 4 名)、ポジティブ条件(高群 6 名、低群 5 名)。**実験デザイン**：条件(2：ネガティブ/中性、参加者間)×レジリエンス(2：高群/低群、参加者間)×表情(笑顔/しかめ面、参加者内)。

刺激：映像のサクラのスピーチ中の笑顔表情、しかめ面表情各 5 回、呈示時間約 3s。

測定指標：主観指標 スピーチ自己評価(ポジティブ評価 5 項目、ネガティブ評価 7 項目、5 件法)。

生理指標 顔面筋電図(facial electromyography; fEMG)として、ネガティブ感情を反映する皺眉筋、ポジティブ感情を反映する大頬骨筋。 **操作チェック** サクラ印象評定(9 項目、7 件法)。

印象操作：参加者がスピーチしている間の他者(サクラ)の聞く態度により操作した。ネガティブ条件「首をかしげる」、「よそを向く」など、ポジティブ条件「うなずく」「身をのりだす」など、各 3 種類。さくらがスピーチを聞く様子およびスピーチをする様子は録画映像で呈示した。**手続き**：二人一組でモニター越しにお互いスピーチを行うことを教示した。①ベース測定、②スピーチ準備、③参加者スピーチ(サクラの印象操作)、④他者(サクラ)の印象評定、⑤サクラスピーチ、⑥ポストベース。

分析：ースピーチ評価 条件×レジリエンスの ANOVA。fEMG 条件×レジリエンス×表情の ANOVA。

結 果

操作チェック：サクラ印象評定の項目ごとに対応のない t 検定を行った。「友好的-敵対的」の項目が有意で [$t(9) = 2.88, p < .01$]、ネガティブ条件がポジティブ条件より敵対的だと悪印象を持たれており、操作は妥当であることが示された。

スピーチ評価：ネガティブな項目で、条件×レジリエンスの交互作用が有意であった。下位検定の結果、レジリエンス低群において、ネガティブ条件の方でポジティブ条件より自己評価が否定的だった [$F(1,16) = 1.95, p < .05$]。ポジティブな項目では、いずれにおいても有意差は認められなかった [$F(1,16) = .72 \sim .78, n.s$]

皺眉筋活動(Figure1)：条件×表情の交互作用は有意ではなかった。表情の主効果が有意で [$F(1,16) = 128.65, p < .001$]、しかめ面が笑顔より皺眉筋活動が高かった。条件の主効果が有意傾向であり [$F(1,16) = 128.65, p < .10$]、ポジティブ条件の方がネガティブ条件よりも活性化していた。大頬骨筋活動：条件、レジリエンス、表情いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった [$F(1,16) = .37 \sim 1.4, n.s$]。

考 察

皺眉筋・大頬骨とともに、条件と表情の交互作用が認められないことから、仮説 1 は支持されず、他者との関係により表情を柔軟に変化させているわけではなかった。しかし、皺眉筋において、条件の主効果が有意傾向であったことから、主にしかめ面に影響が反映されやすく、しかめ面の表出が小さくなるという傾向が認められた。また、皺眉筋、大頬骨筋いずれにおいてもレジリエンスの影響は確認されず、仮説 2 も支持されなかった。仮説不支持の原因として、参加者数が少ない点があげられる。また、内省報告からはポジティブ条件においてもネガティブな印象を受けやすいことが示された。内省報告で、印象操作の反応タイミングにズレが生じていることが報告されており、それが原因でポジティブ条件においてもネガティブな印象に傾いたと考えられる。各参加者に対して印象操作を正確に行うために録画映像を用いたが、反応にズレが生じる不自然さを招いた可能性がある。今後は、直接的な対人関係場面を用いての検討が必要である。